

一八八六年四月十六日(金)

コシポールの別荘で信者たちと共に

コシポールの庭で聖ラーマクリシユナとギリシユと校長

コシポールの別荘ひがしかたの東方に、池に下りる階段がある。月が昇った。庭道も樹や草も月の光を浴びている。池から西の方角に二階建ての家がある。二階の部屋に明かりがついていて、池の階段からその光が木製のブラインド越しに見える。あそこで、タクール、聖ラーマクリシユナがベッドの上に乗っていらつしゃるのだ。二、三人の信者が静かにそばに控えていたり、この部屋からあの部屋へと移動したりしている。タクールは病氣治療のため、この別荘に来ていらつしゃるのだ。看病のため、信者たちもいっしょに住んでいる。池のところから、階下に三つの明かりが見える。その一つは信者たちの泊まる部屋である。南側の部屋だ。真ん中の明かりはシユリー・シユリー・マ大聖母タクーラーニー(サーラダー・デーヴィー)の部屋からのものである。タクールの看病のため、ここに泊まっていらいつしゃるのだ。三番目の明かりは台所からのものだ。これは家の北側にある。二階建ての家の庭の南東隅から道が一本、池の階段まで通じている。その道を通って池まで行くことができるのである。道の両側、ことに南側に

はたくさんの果樹や花の木が植えられている。

月は中天に上った。池の階段にギリシユ、校長、ラトゥと、あと一、二の信者が坐っている。そしてタクルのことに付いて話をしていた。今日は金曜日。西暦一八八六年四月十六日。ベンガル暦一二九三年ボイシヤク月四日。チョイトロ白分十三日目。

しばらくして、ギリシユと校長はその道をぶらぶら歩きながら話をしていた――

校長「月の光が美しいですねえ！ 想像もできない程の大昔から、大自然はある一定の法則で動いているんですねえ！」

ギリシユ「どうしてわかりますか？」

校長「自然フアラリテイのシステムは不変です (Uniformity of Nature)。しかも科学者たちは、望遠鏡を通して次々と新しい星を発見する。月には山があると云つて――それを眺めています」

ギリシユ「はつきり言えるんでしょうか。私にはどうも信じられんなあ……」

校長「どうしてですか？ 望遠鏡で、ちゃんと見えるんですよ」

ギリシユ「正しく見ているという証拠はないでしょう。地球と月の間に何かが存在していて、そこを通して光が来るから、そんなふうに見えるのかも知れない」

別荘には、青年たちがタクルのお世話をするために、ずっと泊まりこんでいる。ナレンドラ、ラ

(訳註、タクーラーニー――母、女神を呼ぶ言葉、タクルの女性形)

カール、ニランジャン、シャラト、シャシー、バブラーム、カーリー、ヨーギン、ラトウたちである。家庭を持っている信者たちは毎日のように来て、時には夜も泊まっていたりしている。今日、ナレンドラとカーリーとターラクの三人は、ドフキネーシヨル南神村のカーリー寺の境内に行っている。ナレンドラはそこパンチャパテイの五聖樹の杜で神想を行ずるため、連れだつて行つたのである。

### ギリシユや他の信者たちと共に——信者へのタクルの愛情

〔ギリシユ、ラトウ、校長、バブラーム、ニランジャン、ラカール〕

ギリシユ、ラトウ、校長の三人が二階に上がつてみると、タクルはベッドの上に坐つておられた。看護役のシャシーと、あと一、二の信者が部屋にいたが、やがてバブラーム、ニランジャン、ラカールたちが入つてきた。

部屋は広い。タクルのベッドの近くには、葉やその他の日用品がいろいろと置いてある。部屋の北側にドアがあつて、下から階段を上がつて、そのドアから部屋に入るようになってゐる。そのドアに相對して南側にもドアがあり、そこから南のバルコニーに出られるようになってゐる。そのバルコニーのところ立つて見ると、庭の樹木や月や、さして遠くない大通りなどがよく見える。

信者たちは夜、交替で起きている。蚊帳かやを吊つつてタクルを寝かせてから、夜、当番の信者は部屋の東隅にマットを敷いて、横になつたり坐つたりして一夜を過ごすのである。病苦のため、タクルは夜も殆どお眠りにならないのだ！ だから当番の信者も坐つて、殆ど眠らずにゐるのである。

今日、タクールの病状は少しいいようだ。信者たちは入ってくると床に額ぬかずいて師を拜してから、向かい合って坐った。

タクールは明かりを近くにもつてくるようにと、校長にお命じになった。タクールはギリシユに向かつてやさしくうなずかれた。

聖ラーマクリシユナ（ギリシユに）——元氣かい？（ラトウに）ギリシユさんにタバコをお出し。それからバーンも——（訳註、バーン——キンマの葉にびんろうじゆの実を詰めた唾かみタバコ）

しばらくして再びおっしゃった——「何か、お茶菓子を持ってきてあげなさい」

ラトウ「タバコとバーンはお出ししました。飲み物やお菓子は、只今、店に買いに行っております」  
タクールは坐っておられる。信者の誰かが、花の輪飾りをいくつか持つてきて差し上げた。タクールはそれをひとつひとつ、ご自分の首におかけになった。胸のなかにいらつしやるハリに、花を供えてお祀りしておられるおつもりなのだろうか？ 信者たちは驚いて見つめていた！ すると二つほど首から外して、ギリシユにお与えになった。

タクールは時々、「お茶菓子はまだかい？」とおききになる。

校長はタクールを扇あおいでいる。タクールのそばに、信者がさしあげた白檀の扇がおいてあった。タクールはそれを校長に手渡された。校長は、こんどはその扇であおぎつづける。扇あおいでいると、タクールは首から花輪を二つはずして校長に下さった。

ラトウはタクールに、一人の信者のことについて話していた。彼の七、八才になる息子が一年半ほ

ど前に亡くなったが、その子は父親といっしよの時やキールタンの催された時などに、何回もタクールにお会いしている筈——。(訳註、一人の信者——校長のことである。一八八四年に長男のニルマルを亡くしている) ラトウ「(タクールに)——夕べ、この方はお子さんの持っていた本を見ながら、ひどくお泣きになったそうですよ。奥さんも悲嘆にくれて気が触れたようになられて、ほかの子供さんたちに当たり散らしたりなさるそうです。それに、この方が時々こちらに泊まるので、それで又、ひと騒ぎ起こすのだそうです」

タクール、聖ラーマクリシユナはこの不幸の話を聞かれて、非常に心を痛められた様子で黙りこくっておられる。

ギリシユ「アルジュナはあれほどギターターの真理を学んだのに、息子のアビマニユが死ぬと、悲しみのため気絶しました。ですから、この方がお子さんを亡くして嘆かれるのは、ちっとも不思議じゃありません」

〔俗世において、いかにして神を覚るか〕

ギリシユのためにお茶菓子が出された。ファグの店から買って来た出来たてのコチュリ(豆のペーストが入った揚げパン)やルチ、その他に甘いものなどが並べられた。バラナゴルのファグの店である。タクールはご自分で先ずその食べものをほんの僅かお取りになつて、プラサード(供物のお下がり)になさつた。そうしてから、ご自分の手で食べ物をとつてギリシユに渡された——「とてもいいコチュリ

だよ！」

ギリシユはタクルールの正面に坐つて食べている。飲み物もあげなくては——。タクルールのベッドの南東の隅に水瓶みずびんがおいてあつて、そこに水がある。ポイシヤク月の暑い日だ。タクルールは、「ここに、いい水があるよ」とおっしゃる。(訳註——この水瓶は素焼だったので水分が表面から蒸発するので中の水が冷たく保たれる)

タクルールの病気は重く、立ち上がる力ももうない。

信者たちは驚いて目をうたぐつた。タクルールの腰には何もついていない——裸なのだ！それが幼い子のように、ベッドの上を這うようにいざつて——ご自分で水を汲くもうとなさるのだ。信者たちは息が止まりそうになつた。タクルール、聖ラーマクリシユナは水をコップに注つがれた。コップからちよつと手の上に垂たらして、冷たいかどうかごらんになつた。さほど冷たくない。でも、ほかにこれ以上いい水も見当たらないとお思ひになつてか、気の進まぬご様子で、その水をギリシユにおやりになつた。ギリシユは出された菓子を食べている。信者たちが周りに坐つている。校長は相変らず扇でタクルールを扇ぎつづけている。

ギリシユ(タクルールに)——デベンさんは俗世間を離れるそうです」

タクルールは、いつでも話をなさるといふわけにはいかない。声を出すのが大変な苦痛だからである。ご自分のくちびるを指でさわりながら、合図でギリシユにおききになつた——「家族のものをどうして養うつもりだろう——大丈夫なのかい？」

ギリシユ「さあ、それはどうするつもりなのか、私はよく存じませんが……」

一同、沈黙していた。ギリシユは菓子を食べ食べ、また話しはじめる――

ギリシユ「そうだ、先生！ どっちがいいものでしょうか。苦しみのあまり世間を捨てるのと、世間においてあの御方を求めるのと――」

聖ラーマクリシユナ「(校長に)――ギターを読んだかい？ 無執着の心で世間の仕事をすれば、またはすべてが虚仮であると悟って世間に住んでいけば、やがて本当に神を見ることが出来る。

苦しいから世間を離れるのは、霊階の低い人たちだよ。

家庭を持っている智者はどういうものかわかるかい？ ガラス張りの部屋に住んでいるようなものさ。中も外も、両方ともよく見える――

また、みんな黙ってしまった。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)――コチュリが出来立てで、とてもけっこうだよ」

校長「(ギリシユに向かって) ファグの店のものですよ！ 有名な店です」

聖ラーマクリシユナ「有名なんだよ！」

ギリシユ「(食べながら、笑いながら)――ほんとにおいしいコチュリです」

聖ラーマクリシユナ「ルチはやめといて、コチュリをいっぱいお上がり――。(校長に)でもコチュリは、ラジャス性の食べ物なんだよ」

ギリシユは食べながら話し出した。

〔世間の人の心と本当に捨離した人の心との違い〕

ギリシユ「(タクールに)ときに先生、いまの私の心境は非常に高まっていますが、またすぐ低く下りてしまうのは何故でしょうか?」

聖ラーマクリシユナ「世間に住んでいればそうしたものだよ。時には高くなったり、時には低くなったり——。信仰心が厚くなったり、薄うすらいだり——。女と金にかかりあつて暮らしているからそうなるのさ。世間に住んでいる信仰者は、時には神さまの事を想ったりハリの名を唱えたりするが、また時には女と金のことで心がいっぱいになったりもする。普通の蠅ハルみみたいなものでね——お菓子の上

に止まったかと思えば、腐くさったものやウンコの上に止まったりする。

出世間テヤレギの人たちは話がちがうよ。あの人たちは女と金からすっかり心を引つ込めて、神の方だけに向けることができる。ハリの甘露だけを吸っていられる。正真の出家は、神のほかには、どんなものもイヤなんだよ。世間話が出ると立ち上がって去いってしまう。神に関する話だけに耳を傾ける。正真の出家は神の話だけして、ほかのことには口を開こうとしないものだよ。

蜂は花にだけ止まって蜜を吸っている。ほかのものは蜂には興味がないんだよ」

ギリシユは南側のバルコニーの方に手を洗いに行った。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——神さまへの熱愛が必要なんだよ。神に全心を傾けるためにはね。ずいぶんコチュリを食たべたから、今日はもう何にも食たべない方がいいと、ギリシユにそうお言い」



アヴァターラはヴェーダの規則を超えている——規則に従った礼拝バクティと神の愛に酔いしれた礼拝バクティ

ギリシユはバルコニーから戻ってきて、またタクルの正面に坐りパーンを囓んでいる。

聖ラーマクリシユナ「(ギリシユに)——ラカールたちは、もう何がいいか、何が悪いか、よくわかっている。何が真実で、何が虚偽ウソかというのをよく分かつて世間に暮らしている。嫁さんもいて子供も生まれたが——みんな虚偽のことだとわかっている。一時的なはかないものだね。ラカールたちはもう、世間のことに巻き込まれはしないよ。

泥魚みたいなものさ。泥のなかに住んでいても、体にはちつとも泥がつかない！」

ギリシユ「先生、私にはどうもよくわかりません。先生がそうお思いになれば、すべての人を無執着にも、清浄にもお出来になるのです。俗人であろうと、出家であろうと、すべての人をよくして下さることができのですよ！ マラヤの風が吹けば、どの木も白檀になるのですから——」

聖ラーマクリシユナ「養分を与えなけりや、白檀にはならないよ。シムルの木や何かは、白檀になりやしないよ」

ギリシユ「そんなこと……」

聖ラーマクリシユナ「それが法則というものさ」

ギリシユ「あなたさまの場合は、法則をすべて超えております！」

信者たちは驚いてこの会話をきいていた。校長の扇はときどき動くのを止めている。

聖ラーマクリシユナ「ウン、まあそうかもしれない。信仰の河が洪水になると、まわりの土地は竿の先も見えない程水に浸かる。神の愛に酔っ払えば、ヴェータにかいてある規則など守りやしない。ドルヴァ草を摘むときも、いちいち選んだりしない。とにかく手当たり次第にむしり取る。トウルシーの葉をあつめるときも、ポキポキ枝を折ったりする！　アー、（わたしは）何という境地を通ってきたことだろう！（訳註、ドルヴァ草——ヒンドゥー教の礼拝や供養には欠かすことの出来ない植物。和名は行儀芝）

（校長に向かつて）——信愛が身についたら、ほかには何も要らないんだよ！」

校長「はい、よくわかりました」

〔シーターとラーダー——ラーマやクリシユナなど神の化身の様々な態度〕

聖ラーマクリシユナ「ある決まった態度を神に対してとらなくてはいけない。化身ラーマのときは、シャーンタ（平安）、ダーシャ（召使）、ヴァツツアリヤ（愛情）、サツキヤ（友情）が見られた。化身クリシユナのときにもそれらがあり、このほかにマドウラ（甘美）の態度も見られた。

ラーダーがマドウラの態度をとって——リーラー（戯れ）があつたね。シーターはただ貞女の見本のような態度をとっていて、リーラー（戯れ）はなかつたよ。これらすべて神のリーラーなんだ。違った時代に違った態度なんだ」

以前、ヴィジャイに連れられて一人の気狂いじみた女性が南神村のカーリー寺によく来て、タクー

ルにお聴かせするといつて歌をうたつたものだった。彼女はカーリーを讃える歌や、ブラフマンについて  
の古典の歌を主に歌った。みんなこの女性のことを、パグリ(狂女)と呼んでいた。タクールがコ  
シポールに移られると、その狂女も年中やつてきては、タクールの部屋に入り込もうとする。信者た  
ちはそれを防ぐために大わらわであった。

聖ラーマクリシュナ(ギリシユたち信者に)——あの狂女もマドウラの態度だよ。いつか  
南ドゥキネシヨル神寺に来てね、突然、泣き出した。「どうして泣くんだね?」とわたしは聞いたら、『頭が痛くて——』  
と答えた(一同笑う)。それからまた来たとき、わたしはごはんを食べていた。突然、『お慈悲をいた  
だけませんか?』と言った。わたしは気にもとめずに食べていた。すると、『あなた様は、  
お心で私を突きとばした。なぜですか?』と言う。そこで、わたしは質問した。『あなたは何の態度を  
とっているのかね?』すると、『マドウラの態度なんです!』そこでわたしは、『おや、わたしは母子  
の態度だ! わたしにとつては女は、みんな母親なんだよ!』それでもあの狂女は、『そんなこと私、  
知りません』と言う。だから、ラームラルを呼んで、『おい、ラームラル、この人が、心で突きとば  
したとか何とか言っているから、聞いてあげてくれ』とたのんだ。あの狂女はまだ、ずっとあの態度  
をもちつづけているんだね」

ギリシユ「あの狂女は祝福された人だ! 気狂いでも、信者たちに殴られても、とにかく一日中あ  
なた様のことを想っているんですからね! その態度をもちつづけていても、ちつとも害はないじゃ  
ありませんか!

先生！ 何と申し上げたらいいでしょう！ 以前に、私はどんな人間でしたらう。それが、あなた様のこと思うようになってから、どんなになつたでしょう！ 全く、私は怠け者でした。今、その怠け者は神にすっかり支えられて立ち上がりました！ 罪もありました。今は自我も薄れて、だいぶ謙遜になりました！ ああ、何て言つたらいいのか！」

信者たちはシーンとしていた。やがてラカールは、狂女の心を心配しました。——「憂鬱だなあ。あの人があんまりこちらに迷惑をかけるから、あの人自身も辛い思いをしなけりやならないんだよ」

ニランジャン「（ラカールに）——君には奥さんがあるからそんなふう思うんだよ。僕たちなら、（彼女を）犠牲として突き出せるよ」

ラカール「（ムツとして）——よくそんな偉そうなことが言えるね！ 彼（タクル）の目の前で！」

〔ギリシユへの教訓——金への執着と金の善用——医者 の 稼 ぎ〕

聖ラーマクリシユナ「（ギリシユへ）——この世は女と金だ。大部分の人たちは、金を体の血のように大事に思っている。しかし、どれほど金を大事にしても、いつか必ず逃げていってしまう。

わたしの郷里では田んぼに畝をつくる。うねうねうねうねってどんなものか知ってるかい？ 苦労して田んぼの周囲をすっかり畝で囲んでおくと、大雨の降ったとき畝がこわれて田んぼはダメになってしまう。一方だけ空けておいて芝草か何か生やして平らにしておけば、大雨のときよけいな水はそこから流れ出て、泥土だけ残って作物が豊かに実る。

金を善い方面に使う人たちは、神々を祀ったり、サードゥや信者に喜捨したり寄付したりする。それが本当にためになる使い方だ。それが本当に善い実をゆたかに結ぶ使い方だ。

わたしは医者のかれたもの食べる気がしない。あの連中は、人が苦しんでいるところから金を稼いでくるんだもの！ あいつらの金は、困っている人の血のかたまりだ！」

こうおっしゃって、タクールは二人の医者の名をあげた。

ギリシユ「ラジェンドラ・ダッタ先生は大そう広い心の持主でしてね、誰からも一パイサも受けとりません。その上、もっぱら慈善に使っております」